無痛分娩のご案内

2025.10 日野市立病院

目次

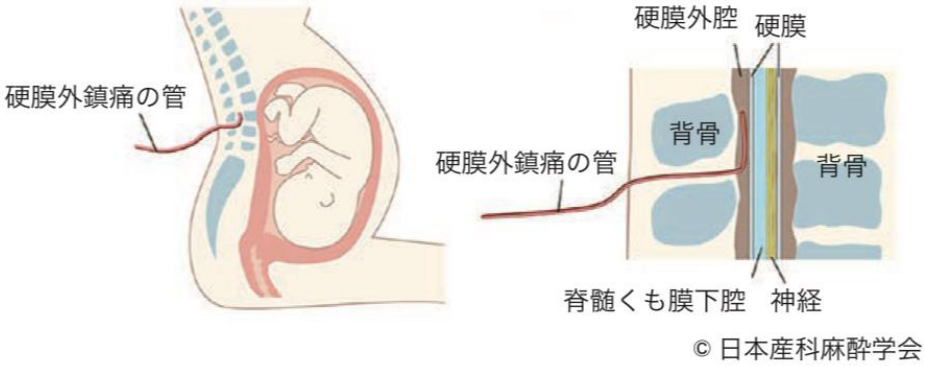
1. 無痛分娩の方法
2. 無痛分娩の流れ
3. 無痛分娩中の過ごし方
4. 無痛分娩中の痛みのコントロール
5. 起こりうる合併症
6. 赤ちゃんへの影響
7. 無痛分娩の手続き
8. 費用

1. 無痛分娩の方法

当院の無痛分娩の麻酔は、硬膜外麻酔または脊椎くも膜下麻酔併用硬膜外麻酔を使用します。どちらの麻酔も分娩の進行の妨げとならないように、低濃度の局所麻酔薬を使用し、完全に痛みをとるものではなく、耐えられる(受容できる)痛みにコントロールすることを目指します。

● 硬膜外麻酔

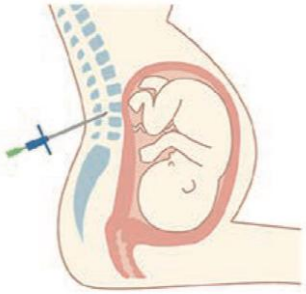
硬膜外腔に細い管(カテーテル)を入れ、麻酔薬を少しずつ注入して痛みを

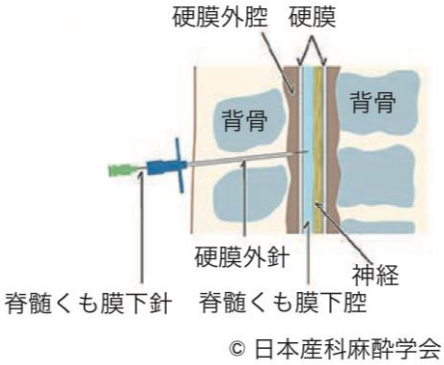


和らげる方法です。

● 脊椎くも膜下麻酔

脊髄を包んでいる膜の中まで針を進め、そこに薬を投与する方法です。





2. 無痛分娩の流れ

当院では計画無痛分娩を行なっています。

無痛分娩をお申し込み後、医師が無痛分娩可能と判断した場合には、妊娠 38 週以降の日程で無痛分娩の予定日を設定します。

<前日>

分娩予定日の前日に入院し、必要な場合は子宮口を柔らかくする処置を行います。

食事（固形物）は２１時までは摂取できますが、それ以降はできません。

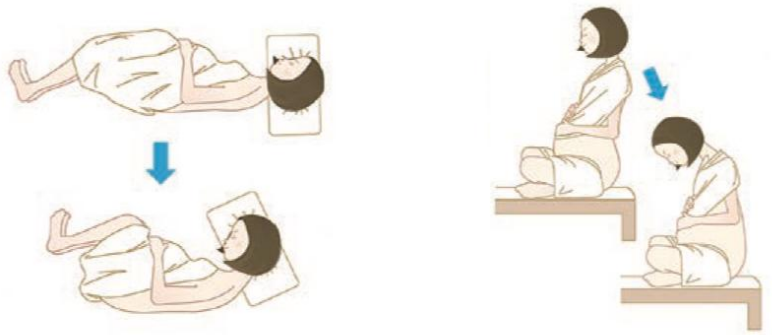
水分は自由に摂取可能です。

<当日>

① 麻酔中の水分補給や薬剤を使用する場合のために点滴を行います。

② 胎児心拍数モニタリング(モニター)で赤ちゃんが元気なことを確認した後に、陣痛促進剤を開始します。

③ 陣痛が発来し、子宮口がある程度開いたタイミングで麻酔を開始します。硬膜外カテーテルを背中の腰あたりから挿入します。下図のように横向きに寝た姿勢、もしくは座った姿勢で背中をなるべく丸めて背骨の間が広くあくようにします。



横向きに寝て背中から麻酔をする時の姿勢

座って背中から麻酔をする時の姿勢

© 日本産科麻酔学会

④ 背中に挿入されたカテーテルから薬が持続的に投与されます。痛みが強い場合はご

自身で追加の薬を投与することが可能です。

⑤ 分娩後の処置が一通り終わるまで麻酔は継続し、処置が終わった時点でカテーテルを抜去します。数時間後にはご自身で歩行することも可能です。

3. 無痛分娩中の過ごし方

＜食事・飲み物＞

麻酔や陣痛等で嘔吐した時の合併症予防、緊急帝王切開となる場合に備えて、

前日 21 時～分娩終了までは食事はとることができません。

飲み物は水、ＯＳ-1 のみ可能です。分娩経過で緊急帝王切開の可能性が高くなった場合には、飲み物も控えていただき点滴による水分補給を行います。

＜歩行の制限>

麻酔が始まると、足の感覚が鈍くなったり、動かしにくくなったりすることがあります。転倒予防のため、**ベッド上で過ごしていただきます。**トイレへの移動もできないため、**定期的な導尿や尿道カテーテル**を必要に応じて行います。

<お母さんのモニタリング>

定期的な血圧測定を行います。

心電図、血中の酸素濃度、お腹の張りは持続的にモニタリングします。

＜赤ちゃんのモニタリング>

陣痛促進剤を開始してからは、胎児心拍数モニタリングを分娩まで装着します。

＜体勢>

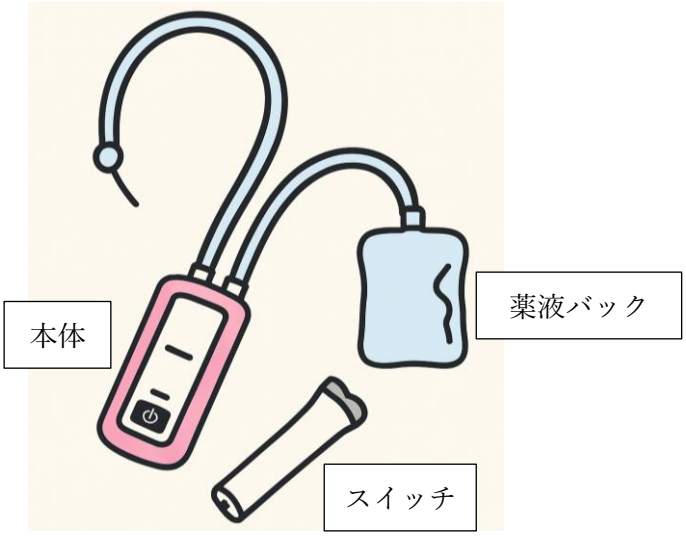
麻酔後、ずっと同じ姿勢にならないように定期的に体の向きを変えるお手伝いをします。長時間同じ体勢でいることによる神経障害や皮膚トラブルを予防するためです。

4. 無痛分娩中の痛みのコントロール

痛みは主観的なものですが、皆で共有するために次のスコアを使用します。

「お腹の張りはわかるが痛みはない」状態を 0 点
「想像できる最大の痛み」を 10 点として、ご自身の感じる痛みの程度の確認を定期的に行います。無痛分娩では 0-2 点（痛みを許容でき、会話ができる程度）を目指しており、痛みを完全になくすものではないことをご理解ください。

痛みを感じた場合には、ご自身でスイッチのボタンを押すことで、背中に入れたカテーテルから追加の薬を投与することができます。ただし、ご自身で投与できる薬の量とタイミングには限度があり、短時間に多量の薬が投与できないようになっています。



ボタンを押しても麻酔が効きにくい、または効かなかった場合には、カテーテルの位置の調整や再挿入を行う場合があります。

5. 起こりうる合併症

① **血圧低下**

麻酔の影響で妊婦さんの血圧が一時的に下がることがあります。点滴や薬を適切に使い、対応することで妊婦さんや赤ちゃんに問題がないようにします。

② **穿刺部の痛み**

硬膜外カテーテルの入っていた部分の痛みを感じることがあります。一時的なものが多いですが、長く続く場合はお知らせください。

③ **かゆみ**

麻酔の影響で妊婦さんの体にかゆみを生じることがあります。通常かゆみの程度は軽いですが、つらい場合は薬剤などで対応します。

④ **発熱**

硬膜外麻酔をした妊婦さんが発熱(38℃以上)することがあります。発熱は分娩後に自然に解熱することがほとんどですが、発熱の原因を調べるために血液検査などが必要となる場合があります。

⑤ **頭痛**

硬膜外麻酔によって頭痛が起きることがあり、座ったり立ったりすると頭痛が強くなるという特徴があります。通常は 1 週間以内に自然に良くなりますが、頭痛がひどい時には治療が必要となることがあることもあります。

⑥ **血腫**

カテーテルを挿入した神経の近くに血腫(血のかたまり)を作ることがあります。カテーテルを抜いた後に、しびれの増強、足に力が入りにくいなどの症状があります。

⑦ **感染**

麻酔のカテーテルから細菌が入り、感染を起こすことがあります。滅菌された物品を適切に使用し、背中を十分に消毒することで予防に努めます。

⑧ **神経障害**

無痛分娩のあとに、足にしびれや感覚障害が起きることがあります。無痛分娩の影響だけではなく、分娩中の体勢や分娩そのものも神経障害の原因となるため、慎重に診察します。たいていは数日で消失しますが、まれに数ヶ月から数年単位で持続することがあります。

⑨ **高位麻酔**

麻酔が広がりすぎることによって、呼吸ができなくなることがあります。無痛分娩中に息苦しさや腕までしびれる場合にはすぐにスタッフにお知らせください。

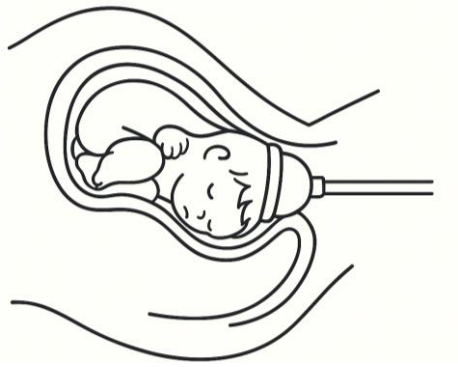
⑩ **局所麻酔中毒**

局所麻酔の濃度が上がりすぎることによって、舌や唇がしびれたり、けいれんを起こしたりすることがあります。

6. 赤ちゃんへの影響

① **分娩遷延**

麻酔の影響によりお産の進行がゆっくりとなる可能性があります。
また、出産時に器械分娩(吸引分娩や鉗子分娩)が必要となる頻度が高くなります。



<吸引分娩>
分娩が遷延した場合や
赤ちゃんの具合があまりよくないと判断した場合には、赤ちゃんの頭に吸引カップを装着し、分娩のお手伝いをします。

② **胎児心拍数の低下**

無痛分娩中は麻酔による影響や血圧低下により、赤ちゃんの心拍が下がることがあります。迅速に対応する必要があるため、頻回の血圧測定や、胎児モニターを常時つけて赤ちゃんが元気なことを確認していきます。

7. 無痛分娩の手続き

無痛分娩を希望される場合は、妊娠 30 週？頃までに主治医にお伝えください。
血が止まりにくい方、ＢＭＩが 30 以上の場合、妊娠経過や今までの病気によっては、無痛分娩をお断りすることがあります。

8. 費用

通常の分娩費用に 10 万円プラスした料金となります。
無痛分娩の麻酔手技を行った時点から費用が発生します。無痛分娩の麻酔は鎮痛効果を保証するものではありません。麻酔効果が不十分であった場合でも、無痛分娩費用は一

律にかかります。
なお、東京都在住の方は東京都から無痛分娩の助成をうけることができることができる場合があります。助成要件に関しては、ご自身でご確認ください。

東京都福祉局 web ページ